

進歩の観念の変容と社会学者の社会の時間

——社会は捉えられなくとも、社会の変化は語らねばならない——

首都大学東京大学院 吉田耕平

1. 目的

社会変動論と呼ばれる一分野がある。文字通り、社会の変化（change）を主題とする経験的研究の分野である。社会の変化は、時間の経過に伴って生じる出来事の一つであろう。それゆえに、社会科学が何らかの形で関わらざるを得ない時間現象の一つと言える。

それでは、時間の経過に伴って社会が変化する、などということを何ゆえに社会科学は述べられるのだろうか。ある時点と他の時点の間にはなぜ、どれだけの時間の幅が認められるのか。二つあるいは三つ以上の時点の社会の状態は、何に照らして、どのていど相違していると言えるのか。——このように、そもそも時間とは何なのかに関わる問題が多数存在する。

しかし、これら個別の問題よりも先に立ち止まって考えるべき問題があるように思われる。すなわち、そもそも二つあるいは三つ以上の時点において、社会なるものは同一なのだろうか。言い換えれば、時間の経過に伴って生じる社会の状態の相違などというものは、時間の経過によらない社会の同一性が確認されるまで、語れないはずではないか。本報告では、これに関連する問題意識を社会学の思想史の中から拾い出し、社会学および社会学者がどのようにして社会の変化の時間を描き出してきたのかに関する一つの見立てを提示したい。

2. 方法と結果

経験的研究を通じて一さしあたり生データの分析を通じて知見を導くアプローチと考えよう—社会の変化を論じる研究の系譜は、19世紀末から20世紀の初頭にかけて大きな壁に阻まれながらも一つの領域として確立されていったと目されるが、この過程はある一連の出来事を抜きにしては語れない。すなわち、19世紀を通じて広まった社会の進歩（progress）という観念が疑念の対象となった中、なお進歩の可能性を探ろうとした20世紀前半における思想の変遷である。

そこで本報告では、まず、進歩の観念の変容一般に関する英国ヴィクトリア朝期思想の研究ならびに進歩の観念との関連で20世紀初頭の米国社会科学の科学化を論じた研究の成果を概観する。これらの蓄積においては、Ross(1990)が示したように、19世紀末に頂点を迎えた社会の改良と前進の観念は1920年を過ぎると衰退し、これに対するある種の代替物として経験的に厳密な知識とこれに基づく社会への積極的な介入が推奨されることになったとされる。

しかし次に、1920年からの20年間を対象として社会学の文献を見渡すならば、たしかに社会の変化に関する特定の方向性—改良と前進によって生じる進歩—を何の断りもなく語る著作は見られなくなったのだが、同時に広くみられるようになったのは、社会に関する厳密な知識ならびに社会に対する意図的な操作がいずれも不可能である、という強い懐疑だった。ところが、このような蔓延する懐疑を打ち破ろうという著作群は——これにはいくつかのパターンが見られるものの、最も雄弁な Bernard (1925) らの考えを概括して記すならば——社会および社会の変化は語らねばならない、したがって社会と社会の変化は捉えねばならない、という強い要請を掲げる。そして再び社会変動に関する研究を相次いで世に問うていったのである。

Dorothy Ross, 1990, *The Origins of American Social Science*, Cambridge University Press.

Luther Lee Bernard, 1925, *Scientific Method and Social Progress*, *American Journal of Sociology* 31:1-18.